

E-2 多層民家の変化について

——山形県東田川郡朝日村田麦俣の場合——

山形大教育 金子 幸子

1. 山形県東田川郡朝日村田麦俣は月山の西側斜面地に立地している集落であるが、当地には一階、二階、チシの三層、またはその上に天井チシのある四層のかや葺層状家屋が密集しており、多層民家として注目されていたので、1959年8月及び翌年の1月に実地踏査を行ない、その結果を家政学雑誌第12巻第4号(1961)年に報告したが、その後改築するものが多く、最近は特に多層民家の変容が顕著なので、その変化状態を検討するため再度調査を行なった。今回はその結果を報告する。

2. 1966年8月と1968年7月に実地踏査法および面接法により調査を行なった。

3. 1960年当時の多層民家のうち、約60%が新築および部分的な改築によって屋根葺材料が瓦などに変わり、旧態のままのものは約40%である。新築したのものには、個室の確保や台所、浴室、便所などに飛躍的な変化が見られるが、階上に作業場を設け、屋根裏空間を物置きとして使用していることなどは、附属建物が無く、立体的に空間を利用していた従来の形式と同様な傾向である。部分的な改築のものは、屋根葺材料の変化と同時に台所、浴室、便所などを改造し、階上に個室を設置している例が多い。多層民家の変化は、主として豪壮なかや葺屋根維持の困難性に起因しているが、山村における稲作技術の向上や、なめこ栽培などによる現金増収など、生産性の向上による生活様式の変化も一要因と考えられる。